

経済・金融 フラッシュ

貿易統計 11年9月

～7-9月期の外需寄与度は前期比0.5%程度のプラスに

経済調査部門 主任研究員 斎藤 太郎

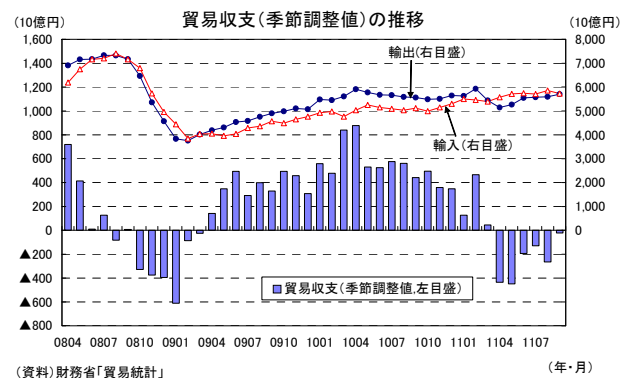
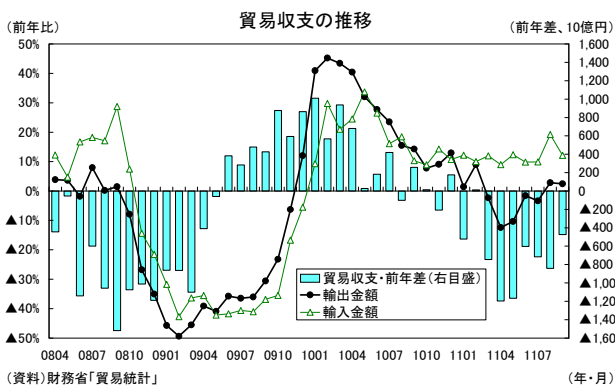
TEL:03-3512-1836 E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

1. 貿易収支(季節調整値)は6ヵ月連続の赤字

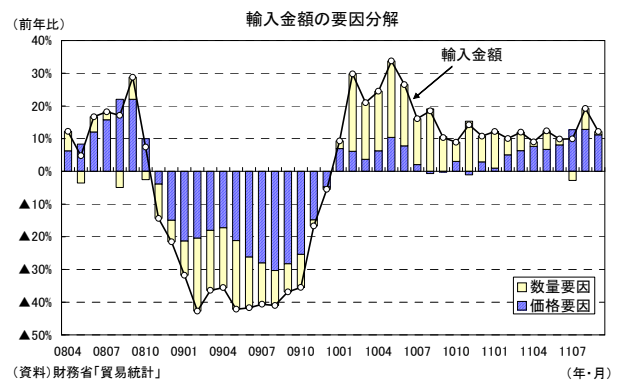
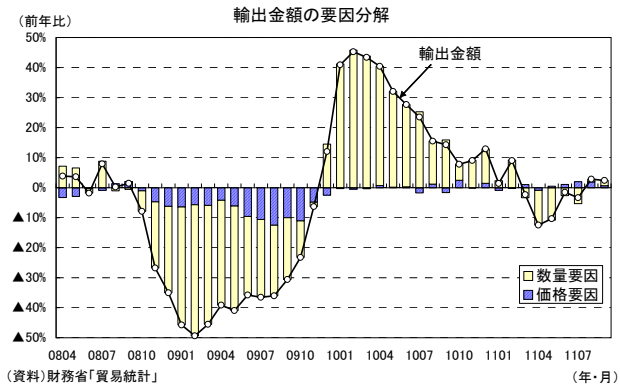
財務省が10月24日に公表した貿易統計によると、9月の貿易収支は3,004億円と2ヵ月ぶりの黒字となり、事前の市場予想(QUICK集計:2,174億円、当社予想は2,028億円)を若干上回った。8月に6ヵ月ぶりに前年比で増加に転じた輸出は伸びが若干鈍化した(8月:前年比2.8%→9月:同2.4%)が、輸入の伸びが8月の前年比19.2%から同12.1%へと大きく鈍化したことが貿易収支の改善に寄与した。

貿易収支は原数値では2ヵ月ぶりの黒字となったが、貿易収支には季節性があるため、基調を判断するためには季節調整値を用いることが適切である。9月の貿易収支を季節調整値で見ると、▲218億円(8月は▲2,652億円の赤字)と6ヵ月連続の赤字となった。赤字幅は大きく縮小したものの、基調としては依然として貿易赤字が続いており、貿易赤字の継続期間はリーマン・ショック後(08/10~09/3)に並んだ。

先行きについては、国内のサプライチェーン復旧に伴う急速なリバウンドの局面が終了しつつある中、円高や海外経済減速の影響が顕在化することから、輸出の回復ペースは鈍化する可能性が高い。一方、輸入は燃料費増加の影響などから高めの伸びが続くことが見込まれるため、貿易収支(季節調整値)は当面はゼロ近傍の動きが続くことが予想される。



輸出の内訳を数量、価格に分けてみると、輸出数量が前年比1.7%(8月:同0.9%)、輸出価格が前年比0.7%(8月:同1.9%)であった。輸入の内訳は、輸入数量が前年比0.9%(8月:同6.0%)、輸入価格が前年比11.1%(8月:同12.4%)であった。

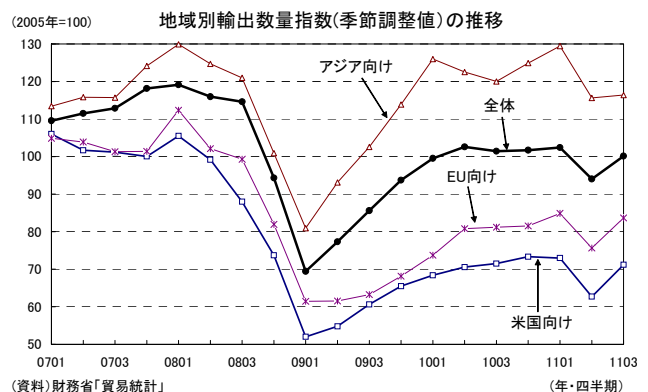
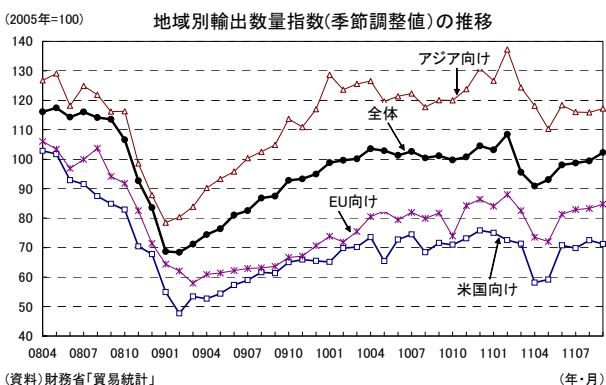


2. アジア向けの輸出が伸び悩み

9月の輸出数量指数を地域別に見ると、米国向けが前年比▲0.5%（8月：同6.1%）、EU向けが前年比3.8%（8月：同4.1%）、アジア向けが前年比▲2.3%（8月：同▲1.8%）であった。季節調整値（当研究所による試算値）では、米国向けが前月比▲1.7%、EU向けが同1.8%、アジア向けが同1.1%、全体では同2.9%となった。

7-9月期の輸出数量指数を季節調整値（当研究所による試算値）で見ると、米国向けが前期比13.6%（4-6月期：同▲14.1%）、EU向けが前期比10.6%（4-6月期：同▲10.9%）、アジア向けが前期比0.7%（4-6月期：同▲10.7%）、全体では前期比6.5%（4-6月期は同▲8.2%）となった。欧米向けは4-6月期の急激な落ち込みをほぼ取り戻す形となったが、アジア向けは極めて低い伸びにとどまった。これまで牽引役となってきたアジア向けの輸出が伸び悩んでいることは、先行きの輸出を見る上では大きな懸念材料と言えるだろう。

一方、7-9月期の輸入数量指数（季節調整値）は前期比0.1%（4-6月期：同▲1.2%）とほぼ横ばいとなった。



3. 7-9月期の外需寄与度は前期比0.5%程度のプラスに

9月までの貿易統計と8月までの国際収支統計の結果を踏まえて、7-9月期の実質GDPベースの財貨・サービスの輸出入を試算すると、輸出は前期比6%程度、輸入は前期比3%程度となることが見込まれる。この結果、7-9月期の外需寄与度は前期比0.5%程度（4-6月期は同▲0.8%）となり、5四半期ぶりに成長率の押し上げ要因となることが予想される。

当研究所では鉱工業生産、家計調査、建築着工統計等の結果を受けて、10/31のweeklyエコノミストレーターで7-9月期の実質GDP成長率の予測を公表する予定である。景気の回復テンポはここにきて緩やかとなっているが、7-9月期は6月までのV字回復の影響で極めて発射台からスタートしたこともあり、現時点では前期比年率6%台の高成長を見込んでいる。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。